

今週の為替相場見通し(2021年1月25日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		103.33 ~ 104.08	103.76	102.50 ~ 104.50
ユーロ	(ドル)		1.2054 ~ 1.2190	1.2172	1.2100 ~ 1.2250
(1ユーロ=)	(円)		125.10 ~ 126.40	126.34	125.50 ~ 127.50
英ポンド	(ドル)		1.3522 ~ 1.3745	1.3682	1.3550 ~ 1.3750
(1英ポンド=)	(円)	*	140.36 ~ 142.33	142.01	140.50 ~ 143.00
豪ドル	(ドル)		0.7659 ~ 0.7784	0.7713	0.7660 ~ 0.7820
(1豪ドル=)	(円)	*	79.51 ~ 80.52	80.05	79.50 ~ 81.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1) 今週の予想レンジ: 102.50 ~ 104.50 円

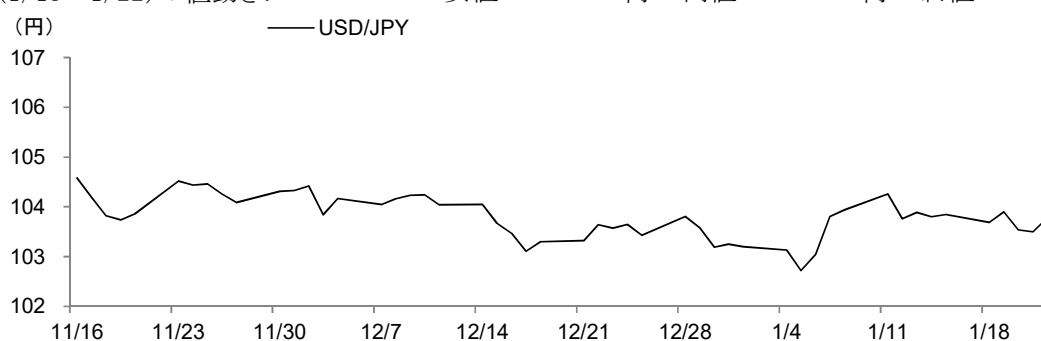
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は狭いレンジでの推移となった。週初18日に103円台後半でオープンしたドル/円は、米国市場休場の中、小動きの展開となった。翌19日には日経平均をはじめアジア株全般が上昇をすると、クロス円に買いが入り、ドル円も上昇した。さらに米金利上昇も受け、ドル/円は一時週高値となる104.08 円まで買い進められた。その後、米国時間ではイエレン前FRB 議長に対する指名承認公聴会において、「米企業の競争力を上げるためのドル安は望まない」、財政については「安定させる必要はあるが、いまは支援策が最優先」との発言を受けてドル売りが強まると、103 円台後半まで下落。20日は米大統領就任式が行われ、バイデン氏が第46代大統領に就任した。新政権が打ち出す政策への期待感などから米株が最高値を更新し、リスク選好のドル売りが活発化すると、21 日には週安値となる103.33円を記録。政策金利を据え置いた後の会見で黒田日銀総裁は大幅な金融緩和の出口を検討するのは時期尚早と発言するも、為替相場への影響は限定的となった。22日には世界的に株価が下落、さらに週末を控えたポジション調整も入るとドル買い戻しが入り、結局103 円台後半で越週となった。

今週のドル/円相場は上値の重い展開を予想する。注目は26-27日に開催されるFOMCに集まる。パウエルFRB議長は今年に入り、早期緩和と縮小観測に慎重な見方を示している。新型コロナウイルスワクチン接種の遅延や世界的な感染拡大は進んでおり、今回のFOMCでも慎重な姿勢を再度示すとの見方が広がっている。さらに、ハト派と知られている複数の地区連銀総裁が今会合から投票メンバーとなることから金利先高感の後退し、ドル売りの流れが継続すると予想する。ただし、リスク回避の動きを受けたドル買いには警戒したい。28日(木)には米10~12月期GDPの発表を予定している。米経済は緩やかに回復しており、市場予想は前期比年率+4%台の成長となっている。ただし、コロナ再拡大を受けたロックダウンの影響が出る可能性もあり、結果に注目したい。さらに、今週は大型ハイテク株などの決算発表が続く。予想を下回る結果となった場合の株価の下落には注意が必要。

(3) 先週までの相場の推移

先週(1/18~1/22)の値動き: 安値 103.33 円 高値 104.08 円 終値 103.76 円



2. ユーロ

市場営業部 営業第二チーム 上野 智久

(1) 今週の予想レンジ: 1.2100 ~ 1.2250 125.50 ~ 127.50 円

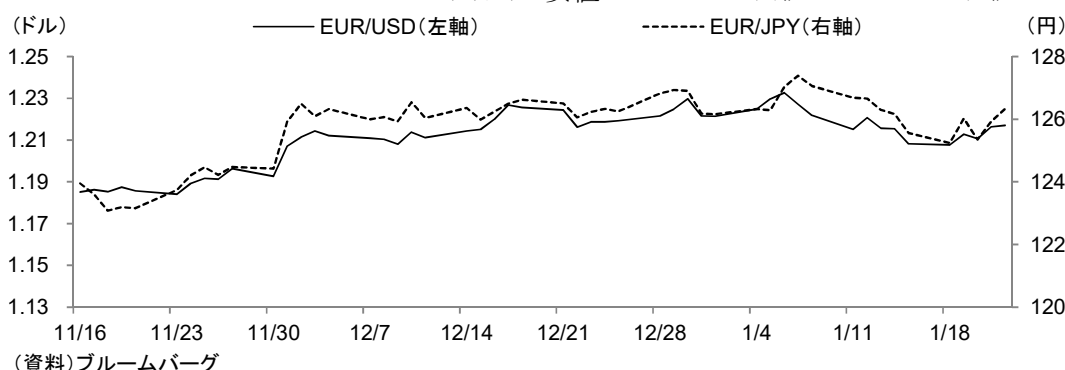
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は上昇する展開。週初18日、1.20 台後半でオープンしたユーロ/ドルは、NY 休日で閑散取引の中でじり安となり、一時週安値となる1.2054 をつける展開に。翌19日は、イエレン前FRB 議長に対する指名承認公聴会の後、ドル売りが優勢になるとユーロ/ドルは1.21 台半ば近くまで上昇。しかし、ドイツのロックダウンの延長決定を受けて、1.21 台前半に小反落した。20日、ユーロ/ドルは米国の大統領就任式を控え1.21 台後半まで上昇するも、ユーロ/ポンドがストップを巻き込み安値を更新する動きに連れ安となり、1.20 台後半まで下落した。その後は買い戻しも強まり、ドル売り優勢になると、ユーロ/ドルは1.21 台前半まで強含む展開となった。21日には、ECB政策理事会において、金融政策は予想通り据え置きとなったが、ラガルドECB総裁が景気見通しに関し、下振れリスクが以前より顕著ではなくなったと発言したことが好感されて、ユーロ/ドルは1.21台後半まで上昇。22日は前日までの流れを受けてユーロドルはじり高で推移し、週高値1.2190を付け、1.21 台後半で越週している。

今週のユーロ/ドル相場は底堅い展開を予想する。先週は週後半にかけて上昇する展開になったが、1.22付近では上値の重さが確認された格好。今週についても1.22台乗せを示現できるかが、騰勢を見極める上での分水嶺となろう。とはいえ、欧州発のイベントとしては先週ECBを消化しており、今週のイベントとしてはFOMC(1/26-27)、そして米州などの大手企業決算。FOMCに関しては、前回フォワードガイダンスを「最大雇用と物価安定の目標達成に向け一段の著しい進展があるまで」という定性的なガイダンスに修正しており、今回の会合をもって政策の変更を行うが依然性は高くないのではないかと。となると、米企業の決算を眺めつつ、経済に対する楽観的な見方が強まれば、ドル売り地合いが強まる中でユーロが対ドルで強含む展開も想定されよう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(1/18~1/22)の値動き: (対ドル) 安値 1.2054 高値 1.2190 終値 1.2172
(対円) 安値 125.10 高値 126.40 終値 126.34



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3550 ~ 1.3750 140.50 ~ 143.00 円

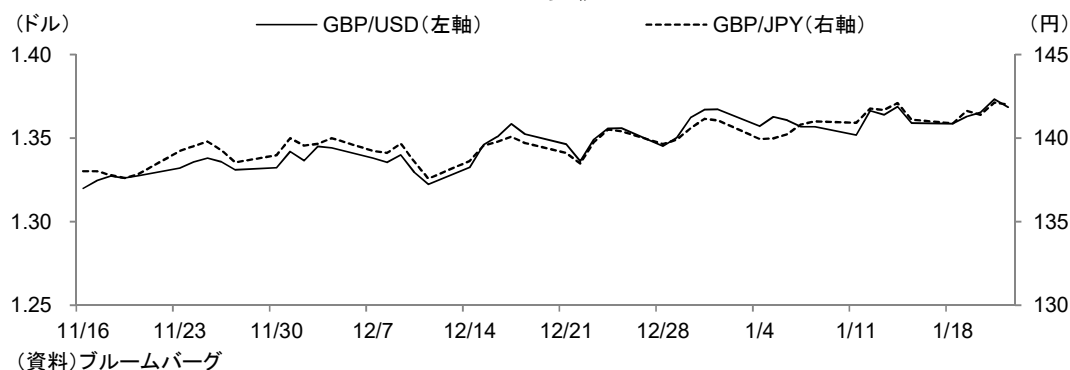
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル、対円では、局地的な反落を交えながらもじり高推移が支配的、振り返って小幅水準を切り上げた。対ユーロでは、週央に掛け上昇したものの、週引け前に上昇分を吹き飛ばし、結果、概ね横這いに終わった。この間、債券側の要因に乏しく、何が上述値動きを作ったのか、はっきりとはしなかった。18日の通貨市場は、米市場が休日だったこともあり小動き。19日のアジア市場で、突然、円が全面安に振れた。米長期金利の上昇が材料視され、確かに米長期金利は上昇していたが、ドルが買われたのは何故か対円だけだった。19日には、財務長官に指名されたイエレン前米連銀議長の指名承認公聴会、20日にはバイデン米大統領の就任式など、注目のイベントが相次いだ。通貨市場が殊更材料視した様子は読み取れなかった。21日の欧州中銀理事会で、ラガルド総裁が、パンデミック緊急購入プログラム(PEPP)の買い入れ枠を「全額使い切る必要はない」などと述べたのは、敢えてユーロ圏の長期金利押上げ要因と読めなくもなかったが、市場の反応は鈍かった。週引け前に伊長期金利が跳ね上がっていたのは、伊政局不透明感の再燃を嫌った伊固有の要因による反応と思われた。英経済指標は、20日に英12月CPI(小幅上振れ)、22日に英12月財政収支(若干赤字が大きかったが、11月分の赤字が大幅に下方修正(縮小)された)、英12月小売売上高などが発表されたが、債券が反応を見せたのは、小売売上高の下振れに若干売り込まれた程度で、その値動きも長続きはしなかった。

今週の英ポンド相場は、方向感に乏しい膠着を予想。膠着を見込むのは、今後も当面、債券側の要因に乏しい状況が続くと見込むから。12月頭に、ポンドは、対ドルで2年半ぶりの高値を更新したまま高止まり、先週まで5週連続でその高値を更新し続けている。対ドルでは、熱狂的なポンド買い相場が続いているように見えるが、対円、対ユーロの値動きを眺めると、確かに足下堅調推移を続けているものの、水準的にはなんら熱のこもった場所(何年かぶりの高値のような)にない。勿論、これは、ドル安の結果に他ならないのだろうが、足下ドル安の要因も明確とは言えない。長らくドルの大きな魅力であった金利差(相対的なドルの高金利)の縮小をドル売りの主因とする見方には説得力もある。ただ、ドルの金利差がほぼ蒸発したのは、昨年3月のことであり、以降、例えば2年物国債の利回り格差は、対英でも、対独でも、対日でもほとんど変わっていない。通常であれば、最も足の速い相場であるはずの為替相場が、金利差縮小に対して10か月も掛けて反応し、今なお材料視し続けているのだろうか。或いは、足下米物価上昇の突出に着目して、実質金利を持ち出す見方もあるが、主要通貨市場では余り流行らない議論ではないか。物価が上がっているということは、金融引き締めが近いということでもあり、実際、2008年の金融危機後には、(火元であるはずの)米が真っ先に利上げに踏み切るとの見方がドルの押し上げ要因と読まれた局面もあった。確かに、米連銀は、物価上振れを看過し、低金利を維持する姿勢を明確にしているものの、10年物米国債の利回りは素直に上昇基調を確立し、上述長期金利格差も、10年物国債利回りで比較すると、(水準自体は未だ低いものの)既に明らかな拡大基調が読み取れる。わからないから、足下方向感がこのまま続くと見込むのもひとつの考え方だろうが、わからないものは、やはり、わからないとした方が良いでしょうにも思われる。とりあえず今は、27日(水)の米連銀公開市場委員会と、その前後の値動きが、今後のテーマについて、もう少しわかり易い手掛かりを与えてくれることを期待したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/18~1/22)の値動き: (対ドル) 安値 1.3522 高値 1.3745 終値 1.3682
(対円) 安値 140.36 高値 142.33 終値 142.01



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー資金室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.7660 ~ 0.7820 79.50 ~ 81.00 円

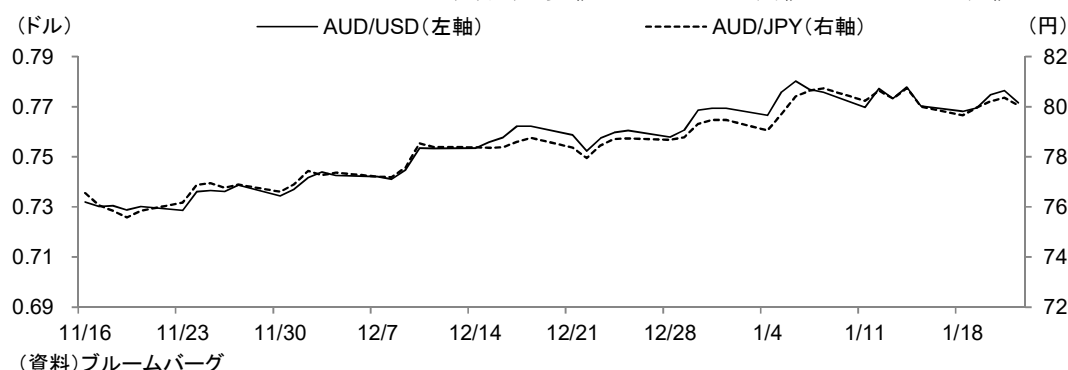
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは18日、米国休場の中、ドル買いの流れが継続。0.77台のせでスタートするも株が軟調に推移し、0.76台へと下落。発表された中国12月小売売上高(前年比)と4Q GDP(前期比)が振るわず前回値、市場予想を共に下回る結果となった。2021年に入り、足下では中国元高が継続していたが、一時1ドル6.5台まで戻し、豪ドルも連れ安となった。ドルインデックスは90.95近辺まで上昇し、今年の最高値を更新した。クロス円に関しては円買いも出ており、AUD/JPYは79.50円近辺まで下落。19日は0.77丁度を挟み緩やかに往って来い。先週末から継続していたリスク回避系円買いの巻き戻しがクロス円で散見された。AUD/JPYは79円後半で継続的なbidが出ていた模様。AUD/USDも0.76後半から0.77前半にかけて上昇。NY入りでは財務長官に指名されたイエレン前FRB議長の指名承認公聴会開催に先立ち、経済再生に向けた支援策を進める姿勢が強調されるという期待から株高、リスクオンとなりドルが売られた。20日は0.76台後半から0.77後半まで1日を通して右肩上がりの上昇を見せた。米住宅指標が予想、前回値を共に下回り、米債利回りが重く推移し、ドル売り圧力に寄与。バイデン氏の米国大統領就任式が行われたが、米追加経済対策への取り組みについての期待から米株は過去最高値を更新した。21日は1日を通して0.77台半ばから後半にかけての比較的狭いレンジで推移した。発表された豪12月雇用統計に関して、失業率は市場予想よりも改善を見せたものの、正規雇用者数の伸びが前回値より鈍化した事で豪ドル相場の更なる着火剤とはならなかった。NY時間では米債利回り上昇がドル買いの流れをサポートし豪ドルは一旦0.7740近辺まで下げるも、バイデン政権に対する追加景気刺激策への期待が広がり、米株S&P、ナスダックともに最高値を更新すると、引けにかけて豪ドルは0.7760近辺まで戻した。22日は0.77台後半から0.77丁度近辺まで反落も、0.77台は死守した。一日を通して株式市場でも利益確定売りやリスク回避フローが出るなど、ドル買いが強まった。

今週は27日(水)に豪4Q CPIと12月企業景況感、28日(木)にFOMC、29日(金)に豪4Q PPIが発表予定されている。豪ドルの動きに関して間接的材料となるFOMCは、新投票メンバーに入れ替わり、初のFOMCとなる。タカ派2名が外れ、シカゴ連銀のエバンス氏等ハト派メンバーが加わり、また筋金入のハト派であるウォラー氏がFRB理事に就任したことで、政策姿勢に影響がでるか声明文をしっかりと読み解きたい。また、量的緩和の規模縮小議論について、開始時期に言及するようなメンバーの発言が今後でてくるかについても注意を払いたい。ここにきて豪指標は堅調な失業率改善や軟調に推移する中国への鉄鉱石輸出量等、やや強弱が入り混じっているが、今週発表予定のインフレデータは今後の豪ドルの方向性を占う意味でも注目に値する。豪4Q CPIの市場予想は前期比で伸びが1.6%から0.7%へ鈍化、前年比では前回と変わらずの0.7%で推移するとみられている。足下の豪ドルの動きに関しては、IMM通貨先物(投機筋)の豪ドル建玉は1月12日時点からロング・ショートが反転し、ロングポジションの方が僅かに大きくなっており、心理的にも豪ドルは頭を抑えられているとみる。また、現在の豪ドルレンジの下限に関しても年明けから見られているドルショートの巻き戻しで足下では21日線を若干割り込むような値動きが見られているが、ここで立て直すのか見守りたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(1/18~1/22)の値動き: (対ドル) 安値 0.7659 高値 0.7784 終値 0.7713
(対円) 安値 79.51 高値 80.52 終値 80.05



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。